

第8回企画展

なか じま ぶ ざん
中島撫山の生涯



18 晩年の中島撫山

久喜市公文書館

平成10年2月13日(金)～3月22日(日)

(2月14日・21日・28日、3月7日・14日・21日は休館)

「中島撫山の生涯」を開催するにあたって

当館は、平成5年10月に開館して以来、「歴史資料として重要な市の公文書その他の記録」を保存し、これらを計画的に整理・公開していくことを主な業務としております。

この公開は、実際に利用者の皆様が手にとって閲覧していただくことを原則としていますが、その一方で公文書館をたくさんの市民の皆様にご利用いただくため、年2回の企画展を催し、公文書館資料の紹介にも努めています。

8回目を迎える今回は、「中島撫山の生涯」を開催することにいたしました。

小説家中島敦の祖父として知られる中島撫山は、名誉や利益を求めることを好まず、時流に迎合することを嫌い、清貧な一学者として明治期に久喜で「幸魂教舎」という私塾を設立し、その門下から近代久喜の礎を築いた数多くの人材を輩出しました。

亀田鵬斎を祖とする亀田門流の流れをくむ撫山の学風は、師である亀田鶯谷の影響を強く受け、神道に傾倒し国学と漢学との調和を模索した「皇漢学」という立場をとっています。実際に、幸魂教舎では『論語』『詩書』等の漢籍の他に、『古事記』『日本書紀』等の日本の古典も多数扱われていたようです。

また、撫山は詩・書・画も巧みであったと言われていました。特に書は、江戸時代に能書家として知られる亀田鵬斎の流れを明治末年まで伝えていたのは撫山ただ一人だけであったというようなことが、明治36年刊行の『明治畸人傳』という本にも書かれています。

今回の展示では、中島撫山の生涯を、久喜との関係・撫山の学問・撫山の書等を中心に、主に中島家に伝えられてきた資料群を中心に紹介してみました。

最後になりますが、今回の展示を行うにあたりましてご協力をいただきました多くの関係者の方々に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

平成10年2月

久喜市公文書館長



8 久喜新町宅（昭和60年頃）

I なかしまぶざん
中島撫山

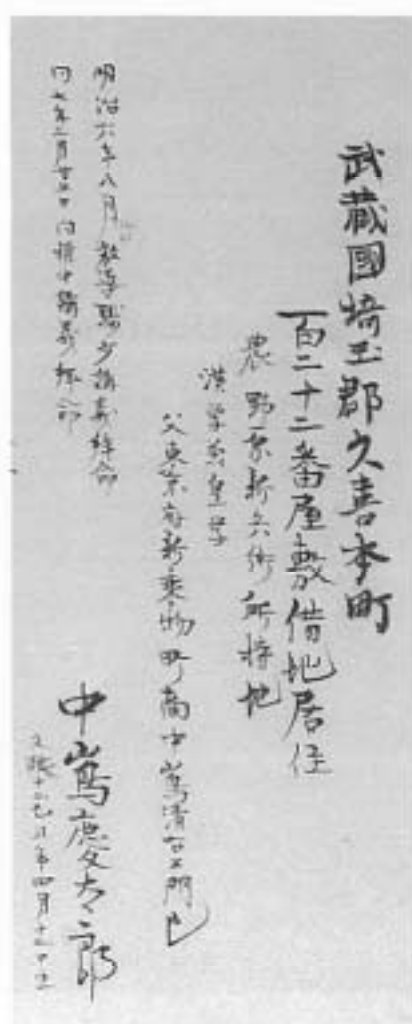


本名は「慶太郎」、字は「伯章」といいます。通称は「慶」を用い、「撫山」は号です。

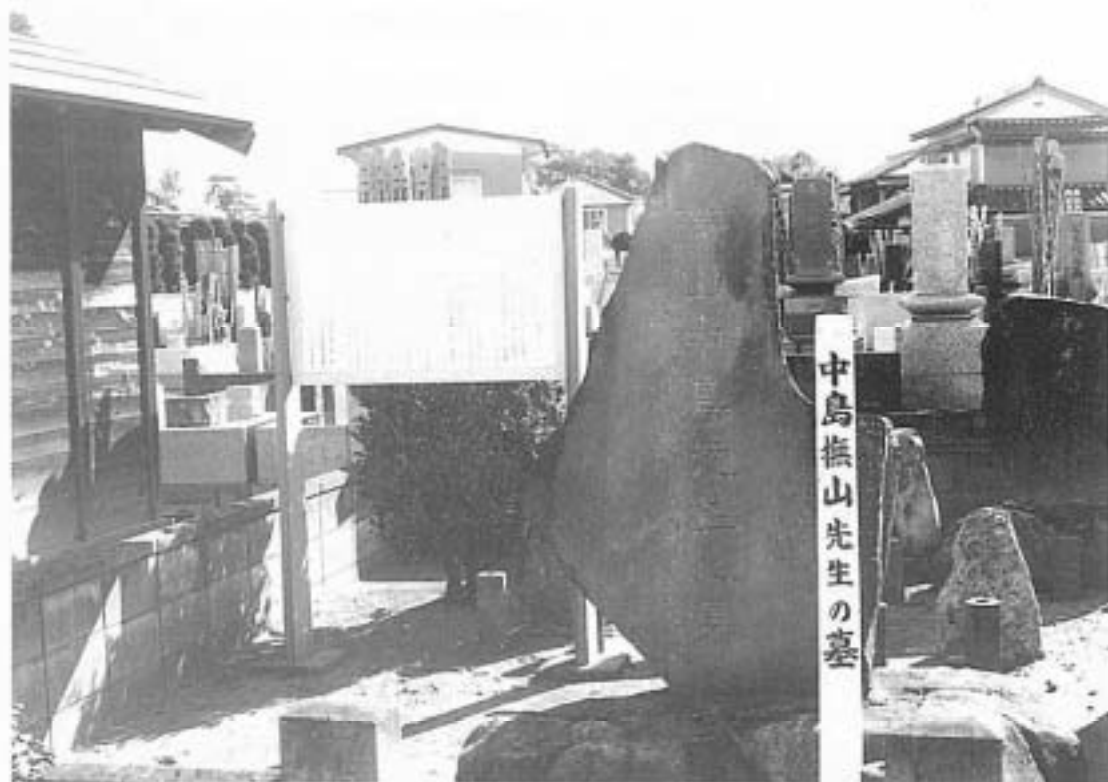
文政12年（1829）4月12日に、亀戸（現江東区）にあった大祖父の隠居宅で生まれます。本宅は、撫山が生まれる1月前に起こった大火災で焼失し、この時まだ新築されていませんでした。実家は、祖父を勇哲、父を良雅、母を登余といい、日本橋新乗物町（現中央区堀留町）で駕籠商を営み、代々清右衛門を名乗り、中嶋屋清右衛門といわれる豪商でした。

撫山が数え11歳の時に母を、19歳の時に父を、25歳の時に師亀田綾瀬を、27歳の時に妻紀玖を、29歳の時に祖父を亡くします。祖父の死を契機に、家業を捨てる決意をした撫山は日光への旅に出ます。その時の紀行文が「楽托日記」で、学者撫山の出発点でもあります。

明治44年（1911）6月24日永眠。享年83歳。市内の光明寺こうみょうじに墓があり、光明寺・久喜市教育委員会による案内看板も設けられています。



7 中島慶太郎家族書上より抜粋



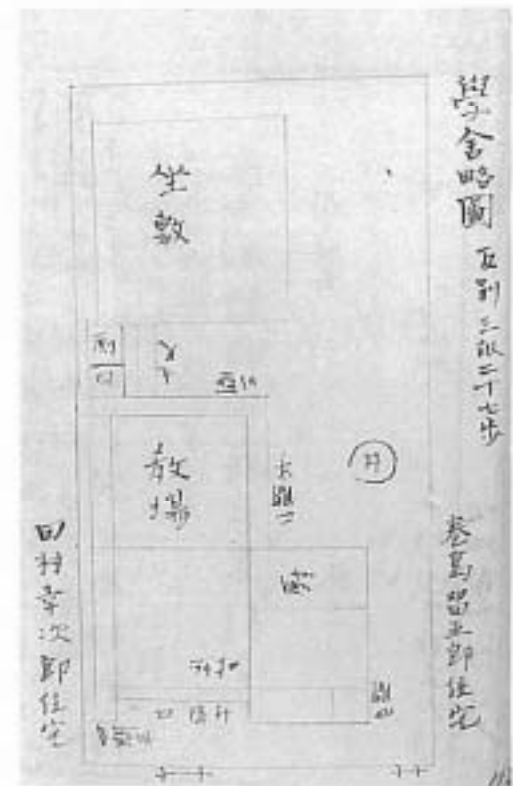
4 中島撫山の墓

II 中島撫山と久喜

1 久喜本町宅

撫山は、はじめ両国矢ノ倉（現中央区）に「演孔堂」という塾を開講します。翌年には神田お玉ヶ池（現千代田区）に移りますが、幕末の政情不安のなか、落ち着いて学問ができる地を求めて、明治2年（1869）12月に久喜に移り住みます。

明治5年（1872）に戸籍法が施行されると、この久喜本町122番屋敷に本籍を編製したようです。場所は、甘棠院に向かう大門通り入口の角にある現在の榎島プラスチック製作所（現本町6丁目）のあたりです。



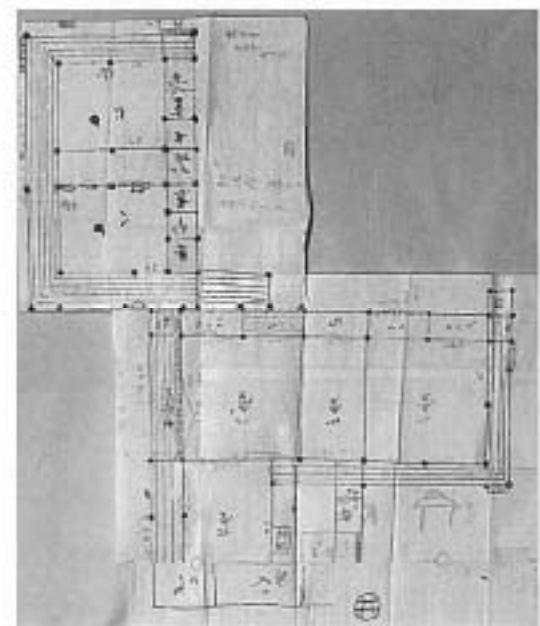
5 言揚学舎略図 埼玉県立文書館所蔵

2 久喜新町宅

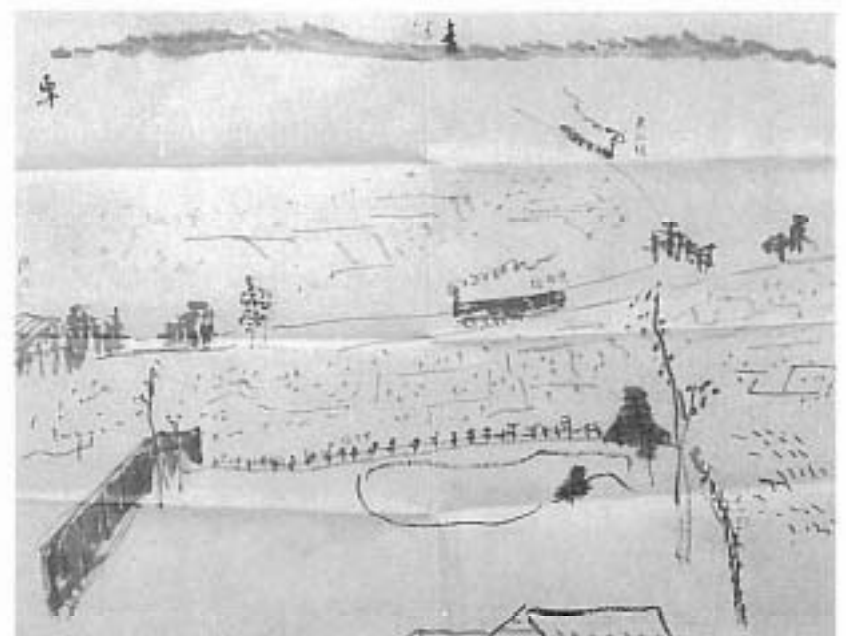
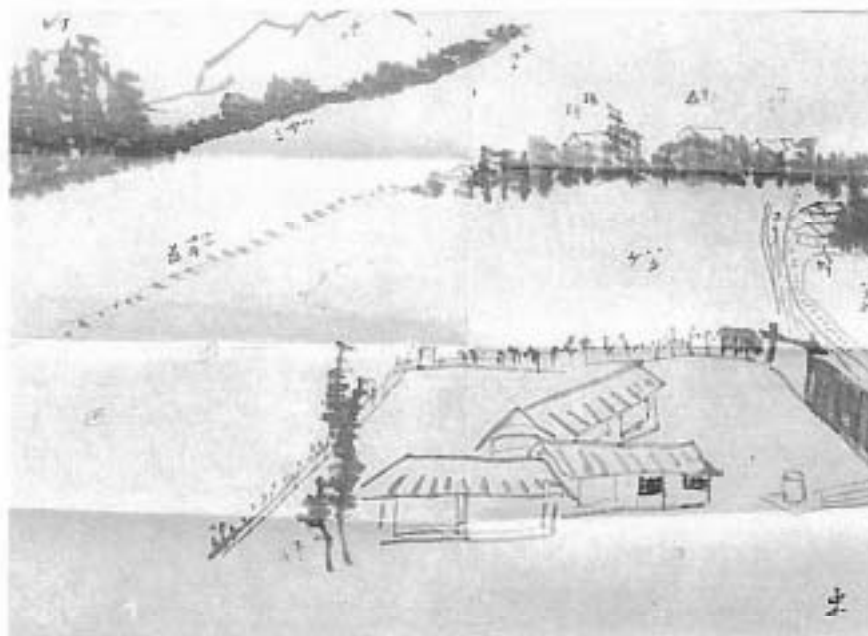
撫山は、明治42年（1909）に住まいを久喜新町（現中央2丁目）に移します。この新居が撫山の生誕地である亀戸の別宅に非常によく似ていたことは、撫山の書簡等にも記されています。

駅前ということもあって、現在この周辺は大きく様変わりしましたが、住人のいなくなって荒廃した建物だけは、当時の雰囲気は今なお伝えてくれます。

なお、この家は、小説家中島敦が、明治末から大正初めの幼少時代数年間を過ごしたところでもあります。



9 明治42年9月19日書簡（慶太郎→煉之助）抜粋



10 明治42年10月26日書簡（慶太郎→端蔵）抜粋

3 幸魂教舎 (言揚学舎)



35 亀田鶯谷筆「幸魂教舎」額

中島甲臣家所蔵

明治6年(1873)に、撫山は神道教導少講義の立場で、私宅に私塾「幸魂教舎」を開講します。しかし、このことは県に好ましからぬ行為として映ったため、県は明治7年(1874)1月に、撫山のこの行為をどうしたらいいか文部省に伺いを出すよう検討しています。残念ながらその後の経緯についてはよくわかりません。ただ、その後も生徒は増え続け、明治9年(1876)には教室を1室増築するなど盛況だったようです。

その後、明治15年(1882)に撫山の2男端蔵が「言揚学舎」を創立し舎主となり、数年後に弟の竦之助に引き継いでいます。明治20年(1887)には、竦之助が教員免許を得て提出した「私立皇漢学専門学校設置願」が県から正式に認可されます。この「言揚学舎」は、「幸魂教舎」と同一のものと考えられています。

11 私立学校設置の件につき文部省伺 (一部意識)

埼玉県立文書館所蔵



撫山が大教院に提出した願文写し

県内の久喜本町に住む中島慶太郎は、別紙(左の写真)のとおり、少講義という立場で大教院の許可を得て、私宅に生徒を集めて教育を行っています。

このことは、教導職の育成という目的ではあるけれども、その実体は、教導職志願の者を教えているのではなく、まだ小学校を卒業していない児童たちも加えて「古事記」「日本書紀」「詩書」「論語」等を講読しているのです。

田舎の人たちは、今でも江戸時代の旧習を懐かしみ、新しい制度を嫌う傾向にあります。このようななかで、このような私塾があることは、政府が行おうとしている小学校教育の妨げとなるばかりか、黙認して他の神官や僧侶が真似をするようなことにでもなれば、新学制の学科や順番といったものは秩序がなくなって、それこそ取り返しのつかないことになりかねません。

これらのことを考えて、どのように処分したらよいかお伺いいたします。

埼玉県庶務課が作成した文部省伺起案(意識)

4 入門生

幸魂教舎の入門生名簿は、現在3冊残されています。撫山・端蔵・竦之助それぞれが舎主の時代のものに概ね分類できそうです。この3冊の名簿には、総勢460人の名前が記載されていて、出身地別にみると久喜・加須・幸手・鶯宮・白岡の順に多く、埼玉県東部地域全体に影響を与えていたことがわかります。

特に現在の久喜市域に限ってしてみると、後に県会議員及び国会議員となった宮内翁助(江面)や、内田立輔(所久喜)・廣澤彌三郎(北青柳)・吉田元輔(久喜新町)・高木亮助(下清久)といった明治期に県会議員となったすべての人の名前が確認でき、この地域に与えた影響がうかがいしれます。

Ⅲ 中島撫山の略歴

和 暦	西 暦	中 島 撫 山 略 歴	数年齢	中島家の主な出来事
文政12	1829	中島慶太郎誕生。	1	
天保10	1839		11	母登余没。
天保13	1842	亀田綾瀬の門に入る。	14	
弘化2	1845	元服し、字を伯章とする。	17	異母弟榮之甫誕生。
弘化4	1847		19	父良雅没。
嘉永5	1852		24	長男靖次郎誕生。
嘉永6	1853	亀田綾瀬没。亀田鶯谷に師事する。	25	
安政2	1855		27	妻紀玖没。
安政4	1857	再婚する。両国矢ノ倉に移り住む。	29	祖父勇哲没。長女婦美誕生。
安政5	1858	私宅において演孔堂を開講する。	30	
安政6	1859	神田お玉ヶ池に移る。	31	次男端蔵誕生。
文久1	1861		33	3男竦之助誕生。
慶応1	1865		37	4男若之助誕生。
慶応3	1867	江戸を避け、大垣氏宅（現春日部市）に一時移る。	39	
明治1	1868	江戸を去り、鹿室の新井氏旧宅（現岩槻市）に移る。	40	5男開蔵誕生。
明治2	1869	久喜本町に移る。書風を一変する。	41	
明治4	1871		43	次女志津誕生。
明治5	1872	戸籍を久喜本町に編製する。	44	
明治6	1873	私宅において幸魂教舎を開講する。	45	
明治7	1874		46	6男田人誕生。
明治9	1876	塾生増加のため教室1室を増築する。	48	7男比多吉誕生。
明治13	1880		52	3女有楽誕生。
明治14	1881	亀田鶯谷没。	53	
明治19	1886		58	長男「靖次郎」を「靖」と改名。
明治20	1887	竦之助が言揚学舎設置願を県に提出し、認可される。	59	
明治22	1889	「亀田三先生伝実私記」を著す。	61	
明治36	1903	「性説疏義」を著す。	75	
明治39	1906		78	異母弟榮之甫没。長男靖没。
明治42	1909	久喜新町に移る。	81	孫（田人の子）敦誕生。
明治44	1911	中島慶太郎没。田人が言揚学舎を廃校する。	83	
昭和6	1931	竦之助によって『演孔堂詩文』が刊行される。		
昭和10	1935	靖の嗣子贖臣によって『性説疏義』が刊行される。		
昭和16	1941	撫山中島先生30年祭が催され、碑が建てられる。		

（主に撫山中島先生30年祭記念出版『撫山中島先生略年譜』をもとに作成する。）

IV 中島撫山の学問

主な撫山の著作

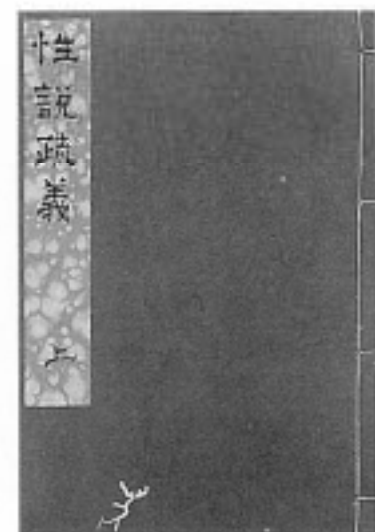
『演孔堂詩文』^{えんこうどうしぶん}は、昭和6年（1931）に3男の竦之助が刊行したもので、撫山が作った詩文を、残された資料等を収集・整理してまとめたものです。その跋で、明治以前の作はほとんど散逸してしまったと竦之助がいうように、現在残されている中島家の資料群にも明治以前の資料はほとんど残されていません。

『性説疏義』^{せいせつそぎ}は、鵬齋が唱えた性説・仁説の2説のうち、性説についてより詳細な注解を行ったものです。この本は撫山75歳の時に著されたものですが、刊行されたのは昭和10年（1935）で、竦之助が出版の手続きをとり、長男靖の嗣子蹟臣が発行者となって刊行されました。

『日文草篆考』^{ひふみそうてんこう}は、日文（ヒブミ）と呼ばれる神代文字の研究を行ったものです。これは平田篤胤や師鷲谷の影響を受けたものです。刊行された形跡はありますが、その実物については未見です。



19 『演孔堂詩文』上・下 昭和6年刊
佐久間照夫氏所蔵



20 『性説疏義』上・下 昭和10年刊

撫山の学風

亀田綾瀬・亀田鷲谷に師事した撫山は、亀田鵬齋を祖とする亀田家学の伝統を受け継ぎ、特に鷲谷門下では五俊秀の筆頭と呼ばれる高弟の1人でした。鷲谷の学風は、祖鵬齋や養父綾瀬の研究スタイルを受け継ぎながらも若干異なり、尊王攘夷を唱え神道に傾倒し、本居宣長や平田篤胤等によって当時有力になりつつあった国学と漢学との調和をはかる「神典聖經一致説」^{しんでんせいきょういっしせつ}の上に立つもので、いわゆる「皇漢学」^{こうかんがく}とよばれるものです。

撫山の6男田人は、その父親（先君）の学問を次のように評しています。

先君は「皇国惟神の大道は、独り漢土聖人伝ふる所の六経仁義の名教と克く之に協ふ。」と言っていました。つまり先君の学は、皇道をもって主となし、六経仁義の教えをもってこれを助けるといことです。これは先君の学の世のいわゆる漢学者流と大きく異なる点であります。

（「撫山中島先生終焉之地」碑より一部抜粋・原漢文）

主な撫山の蔵書

中島家に残された蔵書は、漢籍類が大半で、和書が少しあり、洋綴本はほんのわずかです。この蔵書には撫山の蔵書印や署名のあるものの他に、靖や竦之助等の蔵書印や署名のあるものもあり、撫山の蔵書の規模は判然としていません。

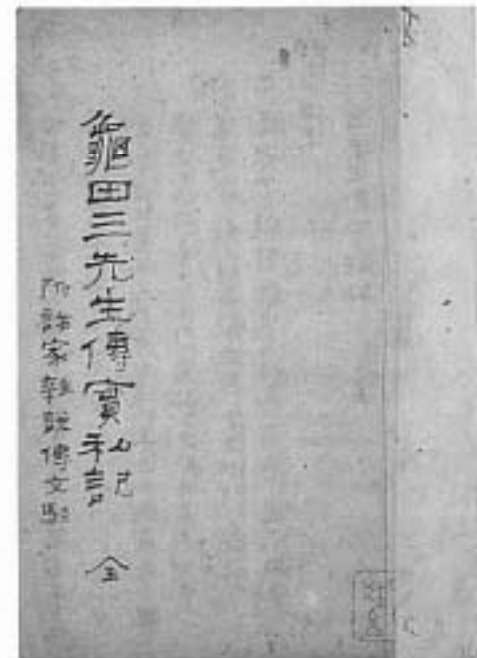
蔵書のなかには、ぎっしりと書き込みのあるものも多く、その価値は図書というだけではなく、歴史資料としても貴重なものです。しかし、明治43年と昭和22年の2度の大水害で、蔵書は水を被ったものが多く、その状態は決して良くはありません。

亀田家学の研究

撫山は、亀田家学特にその祖である亀田鵬斎の研究者としても有名です。明治22年（1889）1月2日に書き上げられた「亀田三先生伝実私記」は、亀田家に伝わる鵬斎に関することを聞き、併せて撫山が直接師事した綾瀬・鶯谷のことも加えてまとめたものです。中島家に残されている幸魂教舎の印が押された「亀田三先生伝実私記 全」には、杉村英治の『亀田鵬斎』に掲載された写本部分に加えて、諸家雑説伝文駁しよけざっせつでんぶんぱくが付されています。

また、「亀田三先生伝実私記 全」と関係のある「亀田鵬斎先生伝」といった資料も残されています。

その後、撫山の3男竦之助は、「亀田三先生伝実私記」を基に、さらに多くの資料調査と情報収集を行い、「増訂 亀田三先生伝実私記」を著しました。



28 「亀田三先生伝実私記 全
—附諸家雑説伝文駁—」

1 亀田鵬斎

初名は「翼」、後に「長興」とし、字は「釋龍」といいます。通称は「文左衛門」を用い、「鵬斎」は号です。その他「善身堂」という別号も用いています。

宝暦2年（1752）誕生。文政9年（1826）永眠。享年75歳。

幕府の寛政異学の禁で弾圧されますが、早川正紀が久喜の地に遷善館せんぜんかんを設立すると招かれて教授となり講義を行いました。また、平成8年に久喜市公文書館の敷地に復元された「新建久喜遷善館記」碑は、この鵬斎が筆をとったものです。

撫山が久喜に移り住んだのは、鵬斎・綾瀬が遷善館で講義していたことが影響していたようです。



30 「新建久喜遷善館記」拓本（軸）
田中靖男家所蔵

2 亀田綾瀬

本名は「長梓」、字は「木王」といいます。通称は「三蔵」を用い、「綾瀬」は号です。その他「学経堂」「仏樹斎」等の別号も用いています。

安永7年（1778）に鵬斎の長子として誕生します。嘉永6年（1853）永眠。享年76歳。

父鵬斎と同様に、久喜の遷善館で講義を行っています。また、「知道軒戸賀崎先生衣幘之蔵」碑は、父鵬斎に代わって綾瀬が代筆したものです。

3 亀田鶯谷

本姓は「鈴木」、初名は「毅」、後に「長保」とし、字は「申之」といいます。通称は「保次郎」、晩年に「嚶彦」を用い、「鶯谷」は号です。その他「学孔堂」「本教教舎」「稽古楼」等の別号も用いています。

文化4年（1807）誕生。後に綾瀬の養子となります。明治14年（1881）永眠。享年75歳。

撫山の師として、撫山が開講した「演孔堂」や「幸魂教舎」等の額を書いています。



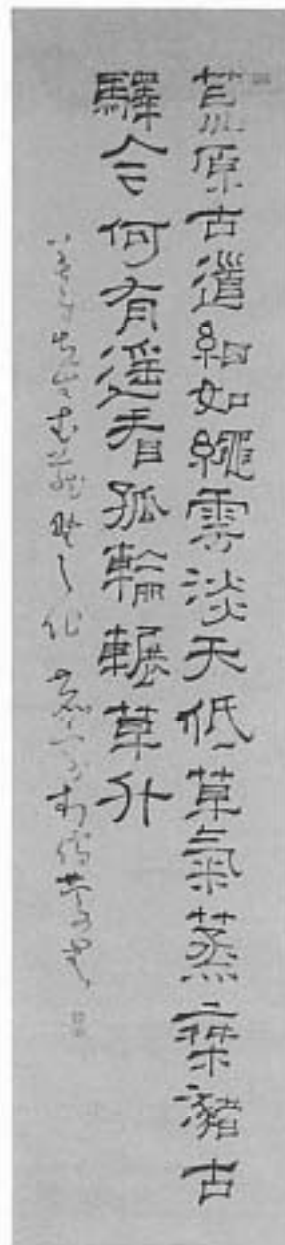
34 亀田鶯谷筆「演孔堂」額

V 中島撫山の書

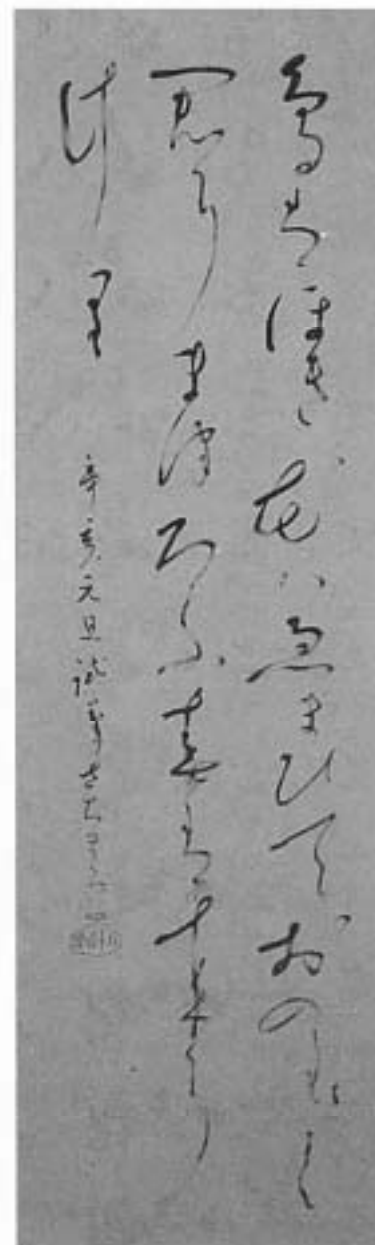
明治36年に刊行された『明治崎人傳』^{めいじきじんてん}という本のなかで、著者阪井弁は撫山の書について「翁又書に巧みなり、其鵬齋流を今日に能くする者、けだし翁一人なるべし。」と記しています。

また、昭和16年にまとめられた『撫山中島先生略年譜』には、明治6年（1873）の幸魂教舎を開講した年に、「書風を一変し、それまでの楷法を捨てて隸体を採った」ことが記されています。

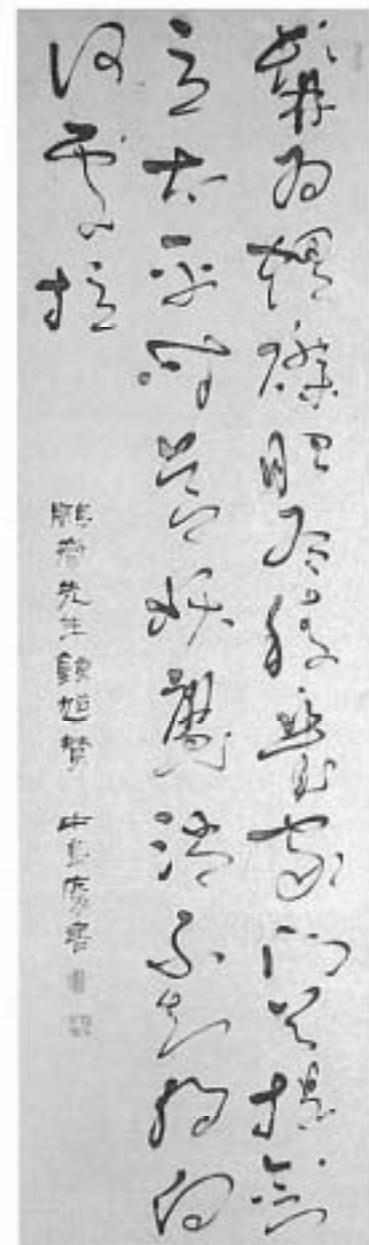
撫山が書いた書・金石・絵馬・幟等は、いまだに市内に数多くのものが残されています。それらのものには「慶」・「撫山」等の署名が多くみられますが、その他にも「演孔道人」「尾張連」「慶麻呂」「佐知麻呂」「佐致麻呂」「さちまろ」等の別号で書かれているものもあります。



37 中島撫山隸書（軸）
田中靖男家所蔵



38 中島撫山仮名（軸）
折原澄子家所蔵



39 中島撫山草書（軸）
小河原清家所蔵

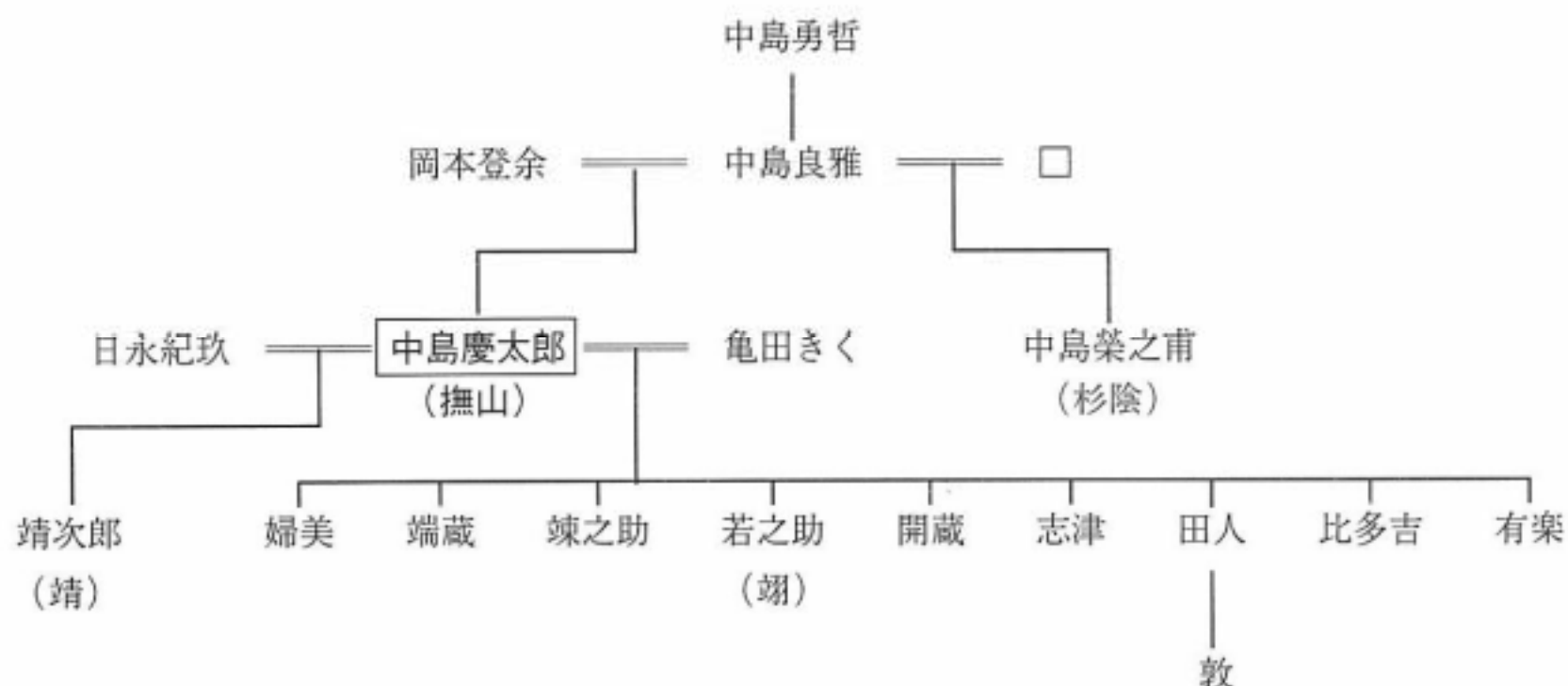


41 中島撫山筆「不磨否得」額



42 中島撫山筆「明倫館」額

VI 中島撫山略系図



主な参考文献

- 村山吉廣「中島敦とその家學—鵬斎門流の中島撫山—」(『中国古典研究』22、1977)
 中村光夫・氷上英広・郡司勝義編『中島敦研究』(筑摩書房、1978)
 久喜市・鷺宮町両教育委員会『撫山中島家蔵書目録』(1978)
 杉村英治『亀田鵬斎』(三樹書房、1981)
 村山吉廣「中島敦とその家學(続)—祖父撫山及び三人の伯父—」(『中国古典研究』27、1982)
 鷺宮町教育委員会調査報告書第二集『中島撫山小伝』(1983)
 村山吉廣「中島撫山の“幸魂教舎”」(『漢文教育』創刊号、1985)
 村山吉廣「家系・教養—「家学を中心に」」(勝又浩・木村一信編『昭和作家のクロノトポス 中島敦』、1992)
 阪井弁『列伝叢書28 明治畸人伝』(大空社、1995)
 東京都中央区立京橋図書館編『中央区沿革図集[日本橋編]』(1995)
 斎藤勝『近代文学書誌体系4 中島敦書誌』(和泉書院、1997)

協力者(敬称略・順不同)

小河原清、折原澄子、佐久間照夫、田中靖男、中島甲臣、中島桓、中島元夫、中村和夫、埼玉県立文書館、東京都中央区立京橋図書館

展示資料一覧

I 中島撫山	21 「日水草篆考 完」
1 写真パネル 中島撫山	22 「学規」
2 復刻 寛保沽券図（新乗物町・長五郎屋舗）	23 「本ヲ立ン事ヲ謀ル」
3 「楽托日記」	24 『神代卷』上・下 享保14年跋
4 写真パネル 中島撫山の墓	25 『訂正 古訓古事記』 明治4年刊
II 中島撫山と久喜	26 『趙註孟子』
1 久喜本町宅	27 『韓昌黎集』（一部欠）
5 写真パネル 言揚学舎略図	28 「亀田三先生伝実私記 全一附諸家雑説伝文駁一」
6 写真パネル 地租改正図（抜粋）	29 「亀田鵬齋先生伝」
7 中島慶太郎家族書上	1 亀田鵬齋
2 久喜新町宅	30 「新建久喜遷善館記」拓本（軸）
8 写真パネル 久喜新町宅（昭和60年頃）	31 『善身堂一家言』乾・坤 文政6年刊
9 明治42年9月19日書簡（慶太郎→竦之助）抜粋	2 亀田綾瀬
10 明治42年10月26日書簡（慶太郎→端蔵）抜粋	32 亀田綾瀬草書（軸）
3 幸魂教舎	33 『学経堂文集』1～4 写本
11 写真パネル 私立学校設置の件につき文部省伺 （一部意識）	3 亀田鶯谷
12 写真パネル 幸魂教舎印影	34 亀田鶯谷筆 「演孔堂」額
13 幸魂教舎講義定日覚	35 亀田鶯谷筆「幸魂教舎」額
14 言揚学舎教則・校則	36 『学孔堂遺文』上・下 明治16年刊
4 入門生	V 中島撫山の書
15 名簿 明治6年～明治14年	37 中島撫山隷書（軸）
16 及門生名氏録 明治14年12月～明治18年5月	38 中島撫山仮名（軸）
17 入門生氏名籍 明治17年～明治30年	39 中島撫山草書（軸）
III 中島撫山の略歴	40 中島撫山筆「不磨否得」額
IV 中島撫山の学問	41 中島撫山筆「明倫館」額
18 写真パネル 晩年の中島撫山	42 亀田鵬齋草書（軸）
19 『演孔堂詩文』上・下 昭和6年刊	VI 中島撫山の略系図
20 『性説疏義』上・下 昭和10年刊	43 写真パネル 撫山葬儀後 久喜にて

（この図録は再生紙を使用しております。）



12 幸魂教舎印影

公文書館利用案内

開館時間:9:00~17:00

休館日:土曜日・日曜日・国民の祝日・年末年始
(企画展の期間中は、日曜日も開館します。)

交通案内:JR宇都宮線・東武伊勢崎線
久喜駅西口下車 徒歩17分(市役所西側)